

平成30年6月20日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26370120

研究課題名（和文）19世紀フランスにおける芸術とその場所性

研究課題名（英文）Art and its Placeness in Nineteenth-Century France

研究代表者

上村 博（UEMURA, Hiroshi）

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20232796

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀のフランスで芸術作品の制作と受容にあたって、場所への関心がどのように機能していたのかを考察し、以下の知見を得た。1) 美術館に代表される芸術の自律的空間が確立する一方で、芸術と土地や場所との関係性を重視する傾向は根強く、文学や美術の主題として土地が好んで選ばれたが、そこには、自己のアイデンティティを土地やコミュニティに帰属させる思想の浸透が大きく関与していた。2) また、近代的な都市生活者の自己疎外感が、旅行とつながり芸術表現においても、特定の場所の経験を真正な生として追求させた。

研究成果の概要（英文）：This research verified the importance of place in the production and reception of artwork in nineteenth-century France. As autonomous institutions of art, like museum galleries, were established, the identification of a work of art with its native place persisted. Further, the Romantic idea that attributes one's identity to his or her local or national origin expanded. Modern urban inhabitants' sense of alienation compelled them to pursue an authentic life in the experience of a particular place, both through tourism and artistic expression.

研究分野：美学および芸術論

キーワード：地方色 美術館 場所性 郷愁 アイデンティティ モダニズム 土地 旅行

1. 研究開始当初の背景

芸術研究については、17世紀後半に成立した「美術」の枠内の「芸術」が長らく対象となってきた。これは芸術学や美学という学問領域そのものが近代的な芸術制度と一緒にあってできあがった経緯から必然的なことであったが、すでに前世紀から、必ずしもその枠内にとどまらない状況が生まれつつあった。ひとつには、従来の美術館や劇場での美的鑑賞ということに収まらない芸術活動の多様化が進み、そのいくつかは意図的に芸術家の社会的コミットを主張するようになったことがある。他方で、娯楽、美食、旅行といったさまざまな感性的な消費行為の機会が増え、もはや「美術」領域が我々にとっての美的な経験を代表するものとは言えなくなっているという事実がある。

こうした状況に対し、従来の作品中心の研究とは異なるしかたでアプローチしようとする試みが生まれた。たとえば社会のなかでの芸術の意味を考える文化政策論やパブリック・アート研究である。また日常性というキーワードで生活スタイルやマス・カルチャーを対象とする研究の方向性もある。しかし前者はその性格上、実践的な方法論や事例研究を志向し、後者は文化現象をその社会的な面に集中して分析する傾向がある。それぞれ有効な面があるものの、実際の出来事や諸々の諸制度と我々の感性的な経験そのものとの関係に対する反省が希薄な憾みがある。

つまり作品の内部だけではなく、また作品の外的な作用だけでもなく、生活される場所のさなかでの芸術経験がどのようにして生まれるのかという点での研究はまだ十分ではない。研究代表者は、長らく芸術と記憶の問題に関心を払い、芸術作品がどのようにして共同体の場を形成するのか、ということを追究してきたが、本研究課題でも、記念物や芸術作品のありかたを巡る文化史的・制度史的な研究に基づきつつ、芸術とその場所に関する原理的研究を行った。

2. 研究の目的

研究そのものの最終的な目標は、芸術がどのような場を作り出すのか、あるいはまた、コミュニティの形成やその拠り所として、果たして何をなし得るのかを批判的に明らかにすることである。しかし当該研究期間においては、そのための基盤的な研究として、なによりもまず19世紀フランスでの作品の「場所」を巡る諸問題を整理することを目的とした。それはこの時代の言説が場所の問題を考える上できわめて参考になるからである。そしてそれは、ひとつには芸術作品がどこに「置かれるべきか」あるいはどのような使命を果たすかという問題であり、もうひとつは作品の表現する、あるいは代表する「場所」の問題である。

18世紀末のグレゴワールやカトルメール・ド・カンシ以来、芸術作品が国家や共同体の

なかでどう用いられるべきか、という議論は、1830年のギゾー内閣での歴史記念物制度以降も決着していない。たとえば21世紀の今日なお論争を引き起こしている、ギリシャのパルテノン神殿のフリーズ(エルギン・マールブルズ)の移動という問題、またカトルメールを始めとする美術館批判も、今日なおアクチュアリティを持っており、当時の議論を参考にすることは大いに有意義である。美術館的な空間での作品と、共同体の生活空間に置かれる記念物的な作品とにどのような差異があると考えられていたのかをまず整理することが、研究のひとつの目的である。

そしてまた、19世紀を通して強まってゆく場所性への関心がどのような理由から、またどのようにして生まれたのかについて探ることも目指した。これは芸術作品の主題としてさまざまな土地が好んで取り上げられるようになった過程を辿るというだけでなく、場所という、現実の生活空間の経験が、作品の表現形式にどう関係するのかという問題でもある。本研究はその点についても、当時の事例に即した分析を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、場所と作品とを巡る19世紀当時の議論を確認することと、実際に作品の制作や受容にそうした議論がどのように関与したのかを検証することを中心に進められた。

そのなかで、当初の計画にはなかったが、19世紀に特定の土地に対する意識がとりわけ顕著に意識された例として、郷愁という精神状態についても相当の検討時間が充てられた。当初はスイスの風土病とみなされ、後には汎ヨーロッパ的な心性となった郷愁の発生と伝播の過程を検証することが、当時の人間がどのように自身を場所に帰属させたのかを考察するのに有効だったからである。

そして郷愁という症候だけでなく、郷愁それ自体が芸術の主題となる作品の分析も行った結果、故郷への関心は、特定の地理的な位置や空間的な特徴に向かうのではなく、本来あるべき真正な生活を現在の場所とは違う場所に求めるという点で、実は異郷への憧憬に通じることが知見として得られた。

このことによって、研究の最終段階でとりあげた、19世紀フランスでも大いに流行った異国趣味やオリエンタリズム画像の意味を解明することが容易になった。

4. 研究成果

本研究では、近代の芸術作品の制作と受容にあたって、場所への関心がどのように機能していたのかを、特に19世紀のフランスを例に取って考察した。19世紀のフランスでは、美術館や文化遺産保護の仕組みなど、今日も大いに機能している諸制度が確立したが、そこでは作品とその「場所」の問題がさまざまな形をとって顕在化した。研究の過程では、場

所の問題をそれに関係する3つの主題を順に検討した。すなわち、芸術作品が置かれる「場所」、郷愁の向かう「場所」、そして異国趣味が対象とする「場所」である。

(1) まず、研究期間のはじめに確認したのは、フランス革命期以降、「場所」への関心がふたつの段階を経て増していくことである。まず、文化芸術は普遍的なものというよりも特定の土地が生み出すものである、という18世紀に強まって来た考えがある。もはや古典古代を唯一の芸術上の基準点とするのではなく、諸国民の芸術が自覚的に求められるなかで、土地やその地の住民の文化的特性に注意が払われるようになった。ついで、作品の置かれる場所の問題が1800年前後に盛んに議論された。芸術作品への審美的な批評が行われ、美術館という作品鑑賞の場ができる一方で、そのことが却って作品を記念物として、すなわち共同体のアイデンティティのためのものとする反美術館の議論も生み出した。作品を個人なり民族なりの感情表現と考えるロマン主義の時代は、作品の置かれる場所によって真正性が決まる、という議論が生まれた。

(2) その確認作業を経て、次の段階として、特定の場所が人間の感性的な経験にとって重要視されるようになる、ひとつの大きな原因が次の考察対象となった。それは、「郷愁」nostalgia という心性の普及が如実に示すとおり、近代の都市住民が自らのアイデンティティの拠りどころを自分の住まい以外に求めるといった状況である。郷愁は単に自分の生まれ故郷に向けられているというだけでなく、カントが『人間学』で指摘するように、むしろ自分の幼少年期の充実した生活に向けられている。それは自分にとっての真正な生活がある(あるいはあったはずの)場所であり、必ずしも現実の場所であるということはない。しばしば夢想され、理想化された故郷が求められた。そのため、実は、郷愁は見知らぬ土地に真正な経験を求める観光旅行とも共通点がある。郷愁も観光も、19世紀を通じて増してくる、人間の移動(移住や旅行)がもたらした新しい生活環境の問題でもある。このように、どこかの土地が人間の喪失した真正な生活を提供してくれるという、いわば場所の神話的な機能は、先に検証した芸術作品の「置かれる場所」に関する議論でも認められる。そしてまた、それは芸術作品が作り出す経験、あるいは「芸術作品という場所」において作用している。この最後の点について、次に考察された。

(3) 研究の最終段階では、19世紀のフランスにおいて芸術作品がどのような場所を表現したのかについて考えるために、特にフランスで作られた、各地の風土を主題とした画像を研究対象としてとりあげた。

19世紀では、絵画や舞台に表現された土地の性格は「地方色」(ローカル・カラー)という言葉によって表現され、きわめて頻繁に利用されていた。「ローカル・カラー」はもともと絵画制作上の技法的な用語であり、画面上の位置に応じて描画対象に与えられる色彩を指していたのが、次第に意味を変化させ、ひとつの地域固有の特色を指すようになってきたという経緯がある。芸術活動に地域性や風土的な性格を求めることは、さまざまな時代や地域で行われてきたが、19世紀以降に顕著となるのは、ナショナリズムやリージョナリズムと結びついた地方色の利用である。国際的に物産や人間の交流が盛んになってから、世界各国の紋切り型のイメージが定着してきたし、一国の内部でも地域の特色が意識されるようになる。その結果、芸術にも特定の地域の性格を反映することが期待され、さまざまな国民様式の作品が生まれることになったし、またそれがフランスを嚆矢として、各国で自国の文化財を歴史的に保護しようとする制度を作らせた。フランスで1830年代に始まる歴史記念物の制度は、文化財保護のためでありながら、そこには地方色を強調したユゴーやメリメといった文学者たちが関わっている。19世紀はトルコ趣味、中国趣味、エジプト趣味などさまざまな異国的モチーフが芸術に登場する。

しかし、それは単に理念的に国家や地域の性格を代表するような紋切り型の像にとどまらなかった。空想的で装飾的なオリエンタリズムだけでなく、地誌的な関心や現地の風土の精緻な観察など、より新しい芸術的感性の表現にも結びついた。たとえば第二帝政期のフランスではじまる、通称ミッシヨン・エリオグラフィック(各地の記念物の記録写真撮影)は、歴史記念物委員会の委託事業でありながら、同時に土地の視覚的な像をきわめて具体的かつ正確に伝えることで、ピクチャレスク的な風景の見方と、より土地に対する新しい見方とを併せ持つ新しい視覚表現を作り出した。そしてまたフランス第二帝政期の芸術家は多くのエキゾチックな画像を制作したが、彼らオリエンタリズム(東方趣味)の画家たちにとっての異郷経験は、ただ作品にエキゾチックな味付けを加えるためのものではない。ジェロームやジームといった、19世紀後半に高い人気を博した画家たちの作品の描く異国は、一方で時代的な偏見も伴っていたが、それと同時に、そうした異国の風物は、彼らや彼らの観衆にとって、自分たちにかつてない色彩や空気感を教えてくれるものであり、場所を描くことが土地の紋切り型を超える発見を与える契機になるものでもあった。

(4) 美術制度が確立してから、作品は自律的な空間を持つことが期待された。しかしその制度のなかにあっても、作品を特定の場所との関係で結びつけることは根強く行われ、場所への崇拝と作品表面の美的な享受とがな

いませになった状況が生まれた。この状況は今日も続いているだけでなく、おそらくますます強まっている。これは画像や情報の氾濫によって、リアルな、ライブ的な経験への希求心が強まったことと無関係ではない。作品の形式そのものが与えてくれる仮象よりも、自然や土地、そしてそこに結びついた生活という、実在が想定されたモノへの信念が、芸術経験の真正さを担保してくれるからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

上村博「異国趣味と真正さ—第二帝政期フランスのオリエンタリズム絵画における「場所」の意味」『京都造形芸術大学紀要』第21巻、2017年11月、pp. 24-33、査読有。

上村博 "From Romantic localism to a new aesthetics of place: Rethinking locality via the example of the Neo Mingei movement", *Art&Media*, The Korean Society of Art and Media, Vol.15-1,2017, pp.11-30. 査読有。

上村博「ユートピアへのノスタルジー」『京都造形芸術大学紀要』第20巻、2016年12月、pp.47-58。査読有。

上村博「場所の病、または作品の外について」『京都造形芸術大学紀要』第19巻、2015年11月、pp.70-79。査読有。

上村博「芸術・言語・自然 身体図式の自己疎外と芸術教育について」『京都造形芸術大学紀要』第18巻、2014年11月、pp. 109-118、査読有。

〔学会発表〕(計2件)

上村博 "The art in situ or the site as the art: a mode of Japanese reception of contemporary art", 6th French Network for Asian Studies International Conference (FNASIC) (フランス、パリ市、国立政治学院での発表)2017年6月26日。

上村博 "Exotisme et Nostalgie — Deux faces de l'authenticité dans l'esthétique moderne de la place", XXth International Congress of Aesthetics (韓国、ソウル市、国立ソウル大学での発表)2016年7月26日。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

上村 博 (UEMURA, Hiroshi)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：20232796

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし